

論文要約

ブラジル黒人運動にとってのアフリカ ——ブラック・ディアスポラが父祖の地に向けるまなざしの諸相

矢澤 達宏

目次

序論

第1章 ブラック・ディアスポラ研究とブラジル

第1節 問題の所在と問題意識

第1項 ブラック・ディアスポラと父祖の地アフリカ

第2項 ブラジルの「アフリカ性」をめぐる相克

第2節 先行研究と分析の視座

第1項 ブラック・ディアスポラに対する分析枠組みの変遷

第2項 本研究の視座

第3項 ブラジル黒人のアフリカに対する姿勢をめぐる先行研究

第3節 分析対象、問題設定および構成

第1項 ブラジルにおける黒人

第2項 分析対象とする局面と問題の設定

第3項 構成

第I部 19世紀におけるアフリカへの「帰還」

第2章 ブラジル黒人のアフリカ「帰還」——その象徴性をめぐって

第1節 問題意識、先行研究および問題設定

第2節 「帰還」現象の概要——背景、経緯、帰結

第1項 奴隷貿易の推移と19世紀前半のバイーア

第2項 マレー反乱と「帰還」の気運

第3項 「ブラジル帰り」コミュニティ

第3節 アフリカへの「帰還」をめぐる考察

第1項 ブラジルからアフリカへの「帰還」現象の特徴

第2項 米国黒人のリベリア入植との比較

第4節 結語

第II部 1920～1930年代のサンパウロ州における黒人運動と黒人新聞

第3章 20世紀前半のサンパウロ州における黒人運動の性格と動態

第1節 問題意識

第2節 先行研究の整理と問題設定

第3節 20世紀前半のサンパウロ州における黒人運動の展開

第1項 揺籃期（1903～1926年）——黒人社交クラブの形成と黒人新聞の登場

第2項 形成期（1926～1931年）——運動の顕在化と統一の試み

第3項 高揚期（1931～1937年）——ブラジル黒人戦線による運動の大衆化

第4節 結語

第4章 黒人新聞のなかのアフリカとアフリカ系人——「アフリカ性」に対する忌避

第1節 問題意識、先行研究および問題設定

第2節 アフリカとブラック・ディアスポラに関する記事の分析

——トピックの選定と論調にみられる傾向

第1項 アフリカおよびアフリカ人に関する記事

第2項 ブラック・ディアスポラおよびパン・アフリカニズム運動に関する記事

第3項 全体としての評価と記事の背後にある意図

第3節 アフリカ志向性の希薄さ——その外因性の当否をめぐって

第4節 結語

第5章 黒人新聞の言説にみる人種とネーション——混血のブラジル人への固執

第1節 問題意識

第2節 先行研究の整理と問題設定

第3節 「人種の天国」言説と黒人を含む「ブラジル人」の構想

——フレイレの議論の源流

第4節 「人種の天国」言説と差別体験の狭間で

- 第1項 人種偏見・差別の認知をめぐる論調の揺らぎ
- 第2項 規範としての「人種の天国」とその限界
- 第3項 制約としての「人種の天国」言説
- 第5節 黒人を中心的要素とするネイション像
 - 第1項 ブラジル人としての正統性の主張
 - 第2項 ネイションと人種をめぐる言説の影響
- 第6節 結語

第Ⅲ部 1960年代後半～1970年代における黒人解放思想

- 第6章 ブラジルをブラック・アトランティックのなかに位置づける
 - アブディアス・ド・ナシメントの思想におけるアフリカ志向とその背景
 - 第1節 問題意識
 - 第2節 先行研究の整理と問題設定
 - 第3節 ブラジル黒人運動史におけるアブディアスの位置づけ
 - 第4節 アブディアスの思想におけるアフリカ志向とその背景
 - 第1項 キロンビズモの概要
 - 第2項 キロンビズモにおけるアフリカ志向の要点
 - 第3項 アフリカと結びつける各論点の発現時期
 - 第5節 アフリカ志向の淵源をめぐって
 - 第1項 アフリカと結びつける各論点の由来
 - 第2項 知識人への反発が加速させたアフリカ性の追求
 - 第6節 結語

結論

- 第7章 まとめと課題
 - 第1節 明らかにしたこと
 - 第2節 残された課題

付録 20世紀前半のサンパウロ州における黒人新聞紙面資料

参照・引用資料

要約

第1章では、まず問題意識を提示した。ブラジルは膨大な黒人人口、豊穡なアフリカ系文化を抱えながら、パン・アフリカニズムのような黒人による国際的な運動に関与することはなかった。なぜなのか。こうした疑問を背景に、ブラジルの黒人が自身の地位向上、境遇改善に向けた行動・言論・思想等において、父祖の地アフリカをどのように位置づけてきたのか、その位置づけ方はどのような要因により規定されてきたのかというのが本研究の問題意識である。

つづいて先行研究のレビューを踏まえ、分析の視座に言及した。従来のブラック・ディアスポラ（アフリカ域外の黒人）の父祖の地アフリカとの関係についての分析は、ルーツ志向を無条件に想定したり、事例も英語圏のものがほとんどだったりと、様々な問題をはらんでいたことを踏まえ、それを克服できるような視点となるよう意識した。資料面も含め、本研究の意図する分析が可能と考えられる3つの局面を対象として選んだ。19世紀におけるブラジル黒人のアフリカ「帰還」現象、1920年代から1930年代にかけてを中心とするサンパウロ州の黒人運動、そして1960年代後半から1970年代にかけての黒人運動家アブディス・ド・ナシメントの思想という3つである。

第2章では、19世紀にブラジル北東部バイーアから西アフリカのベニン湾岸への黒人の「帰還」現象を対象に、彼らのアフリカに対する姿勢を分析した。アフリカ「帰還」の局面に映し出されていたのは、かなりリアルなアフリカだったといつてよい。「帰還」者の大部分が住んでいたと考えられるバイーアは、大西洋奴隷貿易随一の受け入れ港だけあって、きわめてアフリカ色の強い土地柄であった。とりわけ19世紀は、奴隷貿易がまだ禁止されていなかった世紀前半に前例のないほど多数の、しかも出身も同じ地域（ベニン湾岸）のアフリカ人奴隷が流入し、町はアフリカ生まれの黒人であふれかえっていた。大西洋を隔てていたにもかかわらず、 Yoruba、Fon、Hausa といった出自民族集団ごとのアイデンティティさえ、維持されていたという。そうした人々が同じベニン湾岸へ戻ったのであるから、時を経たとしてもそこは馴染みのある場所であった。同時期に米国から「帰還」し、リベリアを建設した黒人たちにみられたようなアフリカの理想化、あるいはそれとは裏腹のアフリカ人への侮蔑といった要素は、「ブラジル帰り」たちのあいだには希薄だった。ただ、だから

といって彼らの「帰還」が「望郷の念」によるものだったと安易に決めつけることはできない。米国からのケースと同じように、ブラジルにも黒人に対する迫害は確実に存在したし、彼らには、両地域のあいだを行き来することにより、経済的・社会的成功の機会をつかもうとするしたたかさもみてとれるからである。そうした動機の場合でも、それが可能だったのは言葉も分かり、土地勘もあり、場合によっては親類縁者さえいるかもしれない、リアルなアフリカだったからこそだったといえる。

それからほとんど時をおかずして、今度はサンパウロで浮上してきた黒人運動にみてとれるアフリカはきわめて対照的なものであった。まずは第 3 章で、この時期の黒人運動の概要を、とくにその全般的な性格と内部の多様性に着目しながら描き出した。そのうえで、つづく第 4 章と第 5 章では、この時期にさかんに発行された黒人新聞の紙面を材料に、父祖の地アフリカに対するスタンスがいかなるものであり、そのありようを規定したのは何だったのかについて分析をおこなった。

まずは第 4 章で、黒人新聞におけるアフリカやブラック・ディアスポラの論じ方の傾向を検証した。紙面にたまに登場するアフリカは、第 2 章でみた「帰還」者にとってのアフリカとは対照的に、記事の書き手や読み手とのつながりを感じさせない、まるで他人事のようなアフリカであった。どこか他からの転載で、しかも編集者のコメントすらない記事として登場することが多かったが、どのような内容の記事を選ぶかには編集者の意志が入り込む余地がある。そのように想定した上でトピックの傾向を検証してみると、政治であれ、スポーツであれ、西洋的な価値基準から評価されるアフリカ人を多く取り上げていることが確認できる。一方、米国の黒人など他地域のブラック・ディアスポラに関する記事の方にも同様の傾向を読み取ることができるが、ブラジル黒人の寄稿者の見解が示されている割合はもう少し高い。ただし、それは肯定的なものばかりでなく否定的なものも多かった。アフリカのトピックと同じように、西洋的な価値基準に基づいた黒人の業績には肯定的な見解が示されたが、ガーヴィーによる分離主義的な主張などには拒絶反応も示された。後者については、第 5 章や第 6 章で明らかにしたように、黒人運動に対してブラジルの白人から人種意識を煽っているという批判が存在することを考えるなら、容易に理解できる反応といえる。

逆に、紙面にまったくといってよいほど登場しないのが、アフリカの価値に関わるトピックである。そして、それと自分たちとを結びつけるアフロ・ブラジル文化も、やはり黒人新聞には取り上げられなかった。それどころか、アフロ・ブラジル文化についての（おもに白

人による) 研究の進展にはいまだちさえ隠すことはなかった。これらの記事の論調やトピックの選定から、この時期の黒人たちの認識がおのずと浮かび上がってくる。それは、西洋的な価値基準により評価されることが、みずからの境遇改善につながるという認識である。それに水を差すようなアフロ・ブラジル文化の話題が避けられるのもうなずけよう。「アフリカ的なアフリカ」は、20 世紀前半のサンパウロ州の黒人運動家たちにとって忌避すべき対象だったのである。

第 4 章において明らかになってきたことを、別な角度からさらに検証しようところみたのが第 5 章である。すなわち、ブラジルにおける人種間関係やブラジルというネーションのありようについての黒人運動家の認識を黒人新聞の論調からあきらかにすることにより、米国の黒人運動にはみられたような分離主義的な志向が発現してこなかった理由を探るというのが問題設定である。相互間の混淆を介し、異なる人種同士が調和的な関係にあるという人種民主主義をブラジルの特徴とする見方は、1940 年代以降定着していったが、それ以前にもその原形とでもいえるような認識は存在していた。ブラジルの黒人運動の統合志向にはその影響が反映されているようにも思えるが、実際には黒人運動家たちは人種偏見・差別が存在することを訴え、それを明白に糾弾していた。「人種の楽園」という見方は、黒人運動家のビジョンを楽観的なものにしたというよりは、むしろ白人による黒人運動批判の根拠に利用されたため、黒人運動家はその枠組みを受け入れざるをえなくなったという面が強かった。さらに、ブラジル人というネーションは 3 つの人種の混淆により構成されるという見方が、人種偏見・差別の不当性の根拠として繰り返し表明された。以上により、「人種の楽園」、「混血のネーション」といったブラジル特有の要因が、ブラジル黒人の確固たる統合志向に影響を与えていたことを確認することができた。

20 世紀前半の黒人新聞を扱った第 4 章、第 5 章の分析から明らかとなるのは、ブラジルの黒人がパン・アフリカニズム運動に関わることがなかった理由は、まま主張されるような言語の壁といった副次的な要因ではけっしてなかったということである。黒人新聞は米国の黒人紙の英語記事をポルトガル語に翻訳して頻繁に掲載していた。第 6 章の範囲となってしまうが、アブディアスラ TEN のメンバーはカミュの著作をオリジナルのフランス語版で刊行後すぐに読み、内容についてあれこれ議論していたという。いずれにせよ、この時期のサンパウロ州の黒人運動家は、ブラジル黒人の地位向上、境遇改善のため、みずからの意志でアフリカに背を向けたのであった。

第 6 章は、20 世紀前半にみられたアフリカに対する忌避が、1980 年代以降の明確なアフ

リカ志向へと転じていく過程とその要因を、アブディアスの思想形成のなかにみいだそうとするところみである。彼は1980年にキロンビズモなる概念を提起し、ブラジル黒人の問題とアフリカやブラック・ディアスポラの問題を様々なかたちで結びつける見方を示してみせた。彼の論稿をさかのぼっていくことで確認できるのは、キロンビズモの根幹的な要素は、1968年に彼が米国に亡命する前の時点ですでに表明されていたということである。先行研究は、彼の思想にアフリカ志向性を芽生えさせた要因として、ネグリチュードや脱植民地化理論など外来の概念や思想の影響を強調している。筆者の検証からもそれは確認できるが、それらと並んで知識人に対する反発もアブディアスの思想形成を方向付けていたことを明らかにした。つまり、人種の混淆や人種民主主義といった「似非科学」的な概念を用いた「学者」による人種偏見・差別の隠蔽、黒人運動に対する批判は、アブディアスをしてそれらに対するオルタナティブの模索へと向かわせた。それはウジャマーの概念のような、独立後のアフリカ諸国の政治的指導者が国家建設の方向性として打ち出したアフリカの固有性と符合したとしても何ら不思議ではない。このようにアブディアスの思想におけるアフリカ志向は、国外からの影響とともに、ブラジル固有の要因によっても形づくられていったことが明らかとなった。

最後に第7章において、本研究が明らかにしたことを整理した上で、他方で論じることのできなかった課題についても提示した。3つの局面それぞれについてブラジル黒人のアフリカに対する姿勢の特徴を導き出せたことは一定の成果だと考える。また、それらの規定要因についても、網羅できたわけではないにせよ、いくつかは明らかにすることができた。とくに人種民主主義のようなブラジル特有の要因がそこに関わっていたことを確認できた意義は大きい。ただ、残された課題も少なくない。その最たるものは、本研究でとりあげた3つの局面がブラジルの異なる地域をそれぞれ背景にしていたことから、同一国内であっても地域的な要因がブラジル黒人のアフリカに対する姿勢にどう影響を及ぼしてきたのか、という問題である。バイーア、サンパウロ、リオデジャネイロ（アブディアスの活動拠点）という違いがそれぞれの局面に大きく関わっていたのは明らかだが、一方で人の移動、情報の流通を考えるなら、この要因を過大視することには慎重になるべきであろう。